

# 日本細菌学会 関東支部ニュース

第29号

## 第78回日本細菌学会関東支部総会のご案内

会期：平成9年10月30日～31日

会場：ホテル横浜ロイヤルパークニコー

感染症、特に細菌による疾病の研究が今新しい時代を迎えています。日本細菌学会会員にとって、今ほど活躍を期待されている時代は四半世紀ぶりではないかと思われます。そのような時期、本学会関東支部総会を開催させていただくことを重く受け止め、意義ある会議とすることができるよう、精一杯の準備を進めております。

細菌学会関東支部でも学際的な学会の合同開催が早くから希望されておりましたが、今回は第46回感染症学会東日本地方会（会長 入交昭一郎先生）と第44回化学療法学会東日本支部総会（会長 井上松久先生）との同時開催を準備することが出来ました。一般演題は細菌学会で独自にひとつの会議室を専用してすべて口頭でご発表戴きます。シンポジウムは第1日目に3学会合同で「感染症起因菌の変遷と将来展望」と題するものを予定しております。敗血症、中枢神経、呼吸器、消化器、尿路、腸管といった各臓器別の感染症について、その起因菌はどのように変遷しているのか、特に臨床の先生方からのご提言を戴き、われわれは基礎研究として今何が重要であるのか、ヒントを得たいと期待しています。また、一般演題へのご応募状況を見ますと、やはり大腸菌O157に関する研究成果が多く寄せられ、支部会員の先生方がこの一年、この問題に必死に取り組んでこられたことが伺えます。細菌学会のシンポジウムでもこの課題を取り上げました。第2日目の午後をすべて費やし3時間半にわたって、「腸管出血性大腸菌O157－基礎と臨床を繋ぐ－」と題しての討議をしていただきます。筑波大学医学部林英生教授と国立感染症研究所渡辺治雄部長に司会



国立小児医療研究センター  
竹田 多恵

をお願いし、基礎と臨床から総合的にこの病気を討議して戴く予定です。発症のメカニズム（渡辺治雄先生）と臨床像・病理像（赤司俊二先生・堀江弘先生）との整合性、危機に際しての疫学的調査の意義（発坂耕治先生）、診断法の進歩（山崎伸二先生）、治療の原理（八木沢守正先生、谷村雅子先生）など早急な問題解決に向けて有効な結論がでることを祈っております。

その他、感染症学会と化学療法学会は合同で外国人講師による招請講演「Viral and host factors involved in AIDS pathogenesis」と教育講演「Systemic inflammatory response syndromes (SIRS)」を企画されています。シンポジウム「抗菌薬の新たな展開」、サテライト市民公開講座「今日の予防接種戦略」、ミニシンポジウム「輸入感染症の変遷と今後の対策」など盛り沢山のプログラムも企画されています。ランチョンセミナーも連日予定されています。

懇親会も3学会合同で同じホテルにて行います。3学会会員の先生方が相互に知識や意見の交換をされ、今後の研究発展に役立つ交流の場を提供させて戴くことが出来れば何よりの幸せです。会員各位の多くのご参加を心よりお待ち申し上げます。

## 第77回細菌学会関東支部総会を終えて

東京歯科大学・微生物

奥田 克爾

感染症に対する恐怖は、HIV、O157:H7等を中心としてマスコミでも取り上げられ続けているが、断然多いのが日和見感染症である。肺炎の原因菌は、ほとんどが常在菌であるにもかかわらず、学会の基調にはなりにくかった。第77回関東支部総会2日間に亘り、日和見感染を中心に特別講演やシンポジウムを組んだ。*Helicobacter pylori*、腸管出血性大腸菌を急遽2日目のワークショップとしてプログラムに入れたため、その時間帯が参加者のピークとなった。しかし日和見感染症のシンポジウムなども参加者が少なかつた訳でなく、180席がほぼいっぱい、第77回関東支部総会は盛会であったと自負している。

第1日目の午前中は歯学領域の一般演題とした。11演題で7菌種が取り上げられた。歯科領域の細菌学の幅広さと解析法の難しさを表していたように思えた。一般演題とワークショップは討論時間も短く、座長や発表者に迷惑をかけた点を反省している。

一般演題に感染症と免疫に関わる発表が少なかった。しかしHIVの演題をアジュバンドや免疫ルートによる応答の違いなどとして考えてみると興味深い発表であった。劇症型A群レンサ球菌の発表では、発症メカニズムの全貌解明への手掛かりへの研究を知ることができた。

第1日目には、長崎大・歯学部山田 毅教授のライフワーク「 $\alpha$ 抗原を中心としてBCG菌抗原の生化学と免疫学の研究」という特別講演があり、激増する結核症の新しい感染予防ワクチン開発に注目が集まっている折、大好評であった。またBCGのもつ多様な生物活性に関しては、多くの脚光を浴びている点について将来の展望を含めて解説を加えてもらうことができた。

シンポジウムⅠ「日和見感染起因微生物の分子生物学的解析」では笹川千尋・奥田研爾両教授に司会をしていただいた。6種類の起因微生物を取り上げ、その中に歯周病原菌を3

種類も入れてもらったが、歯周病は感染症として最も多い疾患であること、compromised hostを中心として全身の健康を脅かす細菌であることを知っていただけた点で良かったと考えている。

腸管出血性大腸菌に関しては、ほぼ同時期にBaltimoreで国際会議がもたれ、集まる演題はないかと危惧したが、病原性、診断および治療ということでワークショップを組むことができた。

*H.pylori*に決め手となる病原因子がないならば、宿主側の因子についてもさらに踏み込んだ研究が増えてくるように感じた。

2日目の特別講演では、大阪大・微生物研の清野 宏教授に「粘膜系免疫細胞間インターネットと微生物感染症」と題して、お話しして頂いた。分泌型IgAを有効に使った感染防御などを、素晴らしい整理された美しいスライドを使って掘り下げた内容で多くの示唆に富んだ解析をいただいた。

シンポジウムⅡは、成内秀雄・多田隅卓史両教授に企画から司会までをしていただいた。「日和見感染におけるcompromised hostの問題点」という真に難解なテーマをお願いしたが、「好中球の機能異常」、「T細胞機能異常」、「B細胞機能異常」についてそれぞれ北川誠一、野々山恵章、眞弓光文教授から感染症との問題点の要点を見事に話していただいた。次いで「MHC欠損」「胸腺細胞アポトーシスと免疫機能障害」「HIVの細胞への侵入と免疫」についてそれぞれ前田平生、木崎治俊、服部俊夫各教授から卓越した考察を含めて話題を提供してもらうことができた。シンポジウムⅡの先生方は主に免疫学会を中心にトップレベルの研究をなさっているが、細菌学会においても感染と免疫のテーマについてさらに協調すべきことが多いという印象をもった。

いずれにしても、学会の活性化は会員の発表と活発な討論にあるということを再確認することができた。参加者、特に座長および発表者のお陰と感謝している。

# 第79回日本細菌学会関東支部総会に向けて

## —若い世代のためのノーネクタイ、運動靴履きの学会—

東海大学医学部分子生命科学部門

中江 太治

細菌学会関東支部総会は聞くところによれば歴史的にも大変古く、そしてまた日本細菌学会では最大の支部会として大いに活発な学会活動を展開してきた。私見ではあるが前の文章の“展開して来た”という過去形に少しのこだわりを覚える。それでは現在形で“大変に活発である”と替けるかという私個人としてはわずかな躊躇を覚えるところである。そのようになってきた背景には学問の流れや情報化など様々な要因があろうと思う。しかし重要なことは学会が活性化され活発な学問の発展がなされ、細菌学を志すものが世に貢献することであろうと考える。そのためには何をなすべきかを考える必要がある。なすべきことはたくさんあるに違いないが、学問の発展に限らず一般的に重要なことは次世代の人材を育成することの様に感じる。次世代の人材を育成するためには若い世代の研究者に世の中に打って出る機会を与えることも重要な因子であろうと考える。

そこで第79回日本細菌学会関東支部総会では大いに若い研究者に活躍してもらいたいと思以下に述べるようなプログラムを準備する予定である。プログラムは4つのシンポジウムと一般演題を予定しているシンポジウムはすべて若い研究者によるシンポジウムを企画したい。若い研究者ではシンポジウムを行うに充分量の実験データがないかもしれないので研究室を代表して複数の研究者、研究室代表者も連名でシンポジウムに参加して頂きたいと考えます。但しシンポジストは大学院性を含む若手の研究者に限りたいと考えています。予定しているシンポジウムは以下の通りです。

- ◎ 感染と宿主応答
- ◎ 細菌の毒素と病原性
- ◎ 化学療法の新しい問題点

### ◎ 新しい感染症と古くて新しい感染症

一般演題は特に制限は設定しないので誰でもまたどんな演題でもふるって出して頂きたい。これも願えるならば若い研究者の発表の場として多くの若い研究者の参加を期待したいと考えます。

学会の場所と日時は次の通り

期 間：1998年7月10(金)・11日(土)

7月10日(金)夜 懇親会

場 所：神奈川県大井町

“いこいの村あしがら”

宿泊施設：約150人収容可能

できるだけ宿泊して頂き、会員の親睦を深めて頂きたい。7月11日(土)学会終了後はスポーツを楽しんで頂きたいと存じます。

使用可能なスポーツ施設

- テニスコート  
(ボールは当方で準備します)

- プール
- 多目的広場
- 自然散策路など

従ってこの学会では

- ノーネクタイ
- 運動靴履き
- 泊まり込み

楽しい学会にしたいと考えています。

連絡先：東海大学医学部分子生命科学部門

Tel：0463-93-4561(内線2606)

Tel：0463-93-5436(直通)

Fax：0463-93-5437

E-mail：nakae@is.icc.u-tokai.ac.jp

## 集 会 案 内

### ○第31回腸炎ビブリオンシンポジウム

日 時：平成9年11月20日（木）、21日（金）  
場 所：三光荘（地方職員共済組合指定宿泊施設）  
岡山市古京町1-7-36  
特 別 講 演：見果てぬ夢を追い続けて28年、久垣和仁  
大腸菌耐熱性エンテロトキシンの成熟化過程と活性発現、岡本敬の介  
一般演題締切：平成9年9月20日（土）  
問 合 せ 先：岡山県立大学保健福祉学部栄養学科 三輪谷俊夫  
☎：0866-94-2159, FAX：0866-94-2159  
e-mail: vpara@fhw.oka-pu.ac.jp

### ○第32回緑膿菌感染症研究会

日 時：平成10年2月6日（金）、7日（土）  
場 所：大分県別府市杉の井ホテル  
学術集会会長：大分大学第二内科 那須 勝  
問 合 せ 先：東邦大学医学部微生物学教室 緑膿菌感染症研究会事務局 大野 章  
☎：03-3762-4151 (ext.2396-7), FAX：03-5493-5415

### ○第13回日本環境感染学会総会

日 時：平成10年2月20日（金）、21日（土）  
場 所：東京プリンスホテル 港区芝公園3-3-1  
特 別 講 演：日本の感染症サーベイランス体制、井上 栄  
教 育 講 演：環境と寄生虫感染、小島荘明  
建築からみた院内感染予防策、伊藤一章  
一般演題締切：平成9年10月15日（水）  
問 合 せ 先：日本大学医学部第三外科学教室 第13回日本環境感染学会事務局  
☎：03-3972-8111 (ext.2471) FAX：03-3957-8299

### ○第28回嫌気性菌感染症研究会

日 時：平成10年3月13日（金）、14日（土）  
場 所：化学会館ホール 東京  
会 長：中山一誠（日本大学医学部第三外科）  
特 別 講 演：Sydney M. Finegold, M.D.  
招 請 講 演：Brian I. Duerden, M.D.  
記 念 講 演：上野一恵 教授（北米嫌気性菌学会賞受賞）  
会 長 講 演：シンポジウム：予定  
問 合 せ 先：日本大学医学部第三外科 細菌研究室  
☎：03-3292-7027、FAX：03-3292-7028

### ○第12回 Bacterial Adherence 研究会

日 時：平成10年7月11日（土）  
場 所：岡山国際交流センター  
会 長：荒田次郎（岡山大学医学部皮膚科学教室）  
問 合 せ 先：岡山大学医学部皮膚科学教室  
☎：086-235-7282、FAX：086-225-1640

# 議 事 録

## 平成6～9年 第7回日本細菌学会関東支部評議員会

日 時：1996年10月5日（土）、午後2時～5時

場 所：日本歯科大学 1号館4階 第3会議室

出席者：新井俊彦、池田達夫、内山竹彦（兼第76回総会長）、江川 清、大国寿士、  
奥田克爾（兼第77回総会長）、川原一芳、佐藤謙一、野田公俊、平松啓一、  
松浦基博、水口康雄、宿前利郎、山本友子、竹田多恵（第78回総会長内定）、  
吉川昌之介（支部長）、長井伸也（幹事）、古西清司（幹事）

欠席者：伊藤 武、井上松久、伊豫部志津子、梅本俊夫、近藤誠一、辨野義己、  
吉田洋子（幹事）

### 1. 第6回関東支部評議員会議事録の承認

第6回関東支部評議員会議事録については、異議なく承認された。

### 2. 第76, 77, 78回支部総会準備状況報告

第76回総会（総会：平成8年11月13・14日、東京女子医大弥生記念講堂；3学会合同シンポジウム：平成8年11月16日、経団連会館）に関して内山総会長より、第77回総会（平成9年6月26・27日、アルカディア市ヶ谷）に関して奥田総会長より、第78回総会（3学会合同学会予定：平成9年10月30・31日、ホテル横浜ロイヤルパークニコ）に関して竹田総会長（内定）よりそれぞれ準備状況について報告があった。

### 3. 平成8年度決算および監査報告

平成8年度決算の各項目について吉川支部長より説明があった。この中で、会費収入が予算に比べて大幅に増額していることが、これは、前年度の未払い分が本年度になって学会事務局から支払われたこと、および三年度分一括納入した会員の会費収入が本年度分に含まれたことによるとの説明があった。評議員より、謝金の項目での支出がなかったことに対する質問が出されたが、これに対し支部長は「本年度は支出しなかったが、次年度の予算には本年度と同額を計上したい」と述べた。会計監査（新井・大国両監査）より、これらの決算が適切に執行されたことが確認されたとの報告があった。平成8年度決算については、異議なく承認された。

### 4. 平成9年度決算案審議

平成9年度の決算案の各項目について、吉川支部長より説明があった。予算案の大部分は前年度と同額であるが、総会開催費を1,500,000円（前年度1,200,000円、第77回、78回をそれぞれ均等に配分）に増額したこと、ならびに合同学会関連の予定外の支出および選挙時の出費を見込んで予備費を400,000円（前年度100,000円）に増額したことが述べられた。

これら平成9年度予算案については、異議なく了承された。

### 5. 日本細菌学会関東支部会則一部改正について

会員の入会手続きが直接本部にて行われることになったため、関東支部の会則「10. 入会には支部長の承認を得…」という記載が実態にそぐわなくなった。そこで、先の評議員会において吉川支部長より将来計画委員会に対して諮問がなされ、これに対する答申が内山将来計画委員長より述べられた。この中で、委員会提案の支部会則改正原案のうち、第10条を削除することについては異議がなかったが、第2条の関東支部の定義に関する変更には、一部不明確な部分が残ったため、次回の評議員会にて再検討されることとなった。

### 6. 総会長選出時期の繰り上げについて

本件に関する吉川支部長から学術集会委員会に対する諮問に対し、宿前委員（井上委員長代理）より答申が述べられた。その

内容は、合同学会の開催を含め、現在の総会長選出のスケジュールでは総会開催のため十分な時間的余裕がない。従って、現行より約1年早く総会長を決定することが望ましい。具体的には、現行の会則に「評議員会はその任期の2年後までの春秋の総会長を選出すること」を内規として付け加えるという案が提出された。これに対して審議が行われた結果、本案は異議なく了承された。なお、吉川支部長より学術集会委員会に対し、本内規に従ったとき本評議員会では今後どのようなスケジュールで総会会長を選出すべきか検討して欲しいとの諮問が改めてあった。

## 7. 各種委員会報告

編集、学術集会、将来計画および事業計画委員会より、それぞれの活動状況に関する報告があった。

---

# フォーラム

## 「日本細菌学会関東支部の皆様へのご挨拶」

国立感染症研究所 細菌・血液製剤部

荒川 宜親

私は、平成8年7月1日付けを以ちまして、名古屋大学医学部細菌教室より国立予防衛生研究所細菌・血液製剤部長として着任いたしましたことを、日本細菌学会関東支部の会員の皆様へ、本紙面をお借りして、ここにあらためてご挨拶申し上げます。

さて、十年程前より、「感染症の時代」が再び巡って来ると言われておりましたが、近年欧米では emerging-, reemerging-infectious diseasesとして新たな微生物感染症の出現や微生物感染症の増加が警戒されるようになり、わが国でも「新興・再興感染症」という用語がマスコミ等でしばしば取り上げられるようになりました。そのような中で、これまでに劇症溶連菌感染症、O157感染症、レジオネラ感染症、耐性結核菌感染症、MRSAに代表される薬剤耐性菌による院内感染症などが次々と問題となって来たことはみなさまの御記憶に新しいこ

とと思います。このような諸情勢の変化もあり、国立予防衛生研究所は創立50周年を迎えた本年4月から研究所の名称を「国立感染症研究所」と改め、これまで以上に感染症の予防、診断、治療等への対応と研究に専念することとなりました。

私の担当する細菌・血液製剤部ではBCG、DPTワクチンの品質管理とそれに関連する研究、抗生物質の国家検査とそれに関連する研究、血液製剤の品質管理とそれに関連する研究など感染症の予防と治療に関する業務を担当しております。結核、百日咳、ジフテリアなどの感染症は、衛生環境の整備、国民の栄養状態の改善、各種のワクチンの開発、各種抗菌薬の開発により先進諸国では激減しましたが、発展途上国や内戦などを抱かえる諸国では難民問題などと絡んで依然として猛威を奮っております。一方、わが国や欧米先進諸国では、各種の抗菌薬に耐性を獲得した細菌の出現と蔓延が大きな問題となっており、例えば、わが国では、イミペネムなどのカルバペネムをはじめ全てのβ-ラクタム薬に耐性を獲得したメタロ-β-ラクタマーゼ産生緑膿菌やセラチアなどが各地の医療施設から分離されはじめております。また、ニューキノロンやアミノグリコシドに耐性を獲得した細菌も増加傾向にあるように思われます。

私は、名古屋大学細菌学では *Klebsiella pneumoniae* の病原因子の一つであります荚膜多糖体の生合成に関与する遺伝子領域の解析と、抗菌薬耐性機構（特にβ-ラクタム耐性）に関する研究を行って参りましたが、国立感染症研究所では行政的な要請もあり、ワクチン製剤の品質管理と関連する研究の推進に加えて薬剤耐性菌の問題への対応を強く求められております。平成9年度からの厚生省の厚生科学研究費補助金（新興・再興感染症研究事業）の重点研究課題として、「薬剤耐性菌による感染症のサーベイランスシステムの構築に関する研究」と「細菌の薬剤耐性機構の分子解析と耐性機序別迅速検出法に関する研究」を同部を中心に推進することが決定されました。一方、「Vero毒素のトキシイドワクチンの開発とO157感染症発症防止に関する研究」としてO157感

染症の克服のための新しい試みも開始することになりました。

私は今後も国立感染症研究所をベースとして「細菌感染症の克服」という古くて新しい「難題」に全力で取り組む覚悟でありますので、関東支部の諸先輩・諸先生の一層のご支援と御協力を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

### 「う蝕のリスク診断 一原因菌の質一」

日本大学松戸歯学部細菌学教室

福島 和雄

う蝕は、人体内の最も硬い組織である歯がミュータンスレンサ球菌と総称される耐酸性乳酸発酵菌により侵される特異な細菌感染症である。その発症は多因子性で、原因菌の種類、多寡及び病原性の強弱などの微生物要因に加えて、歯質の酸に対する抵抗性やショ糖の摂取量及び摂取方法などの諸要因が深く関わっている。人の口腔に棲息しう蝕発生の原因となるミュータンスレンサ球菌 *Streptococcus mutans* (ミュータンス菌) と *S. sobrinus* (ソブリヌス菌、古くは d/g 血清型 *S. mutans* と呼ばれていた) の 2 菌種である。両者は、複数種の glucosyltransferase (以下 GTF) を産生してショ糖存在下で酸産生能と酸蓄積能の高いう蝕誘発性の歯垢を歯面上に形成するという共通の性状を持つが、細菌学的には全く別種の細菌であり、産生する GTF の種類・局在性・機能・歯面に固着・集落化して歯垢を形成するメカニズム、酸性環境下や飢餓環境下で酸を産生する能力など、病原性も大きく異なる。棲息状況にも差があり、ミュータンス菌が大多数 (9 割以上) の成人から検出されるのに対してソブリヌス菌の検出頻度は 1 ~ 3 割である。最近、保有菌種の分布や菌型とう蝕罹患との相関が調べられ、両菌種を保有する人はう蝕罹患リスクが極めて高いこと、同一菌種でも個々人が保有する菌株の病原性 (う蝕誘発能) には大きな差異があること、同一口腔からは 1 ~ 数種の限られた遺伝子型株が分離されること、多くの場合それらは母親の口腔由来であること、などが強く示唆されている。

従って、これからのう蝕予防対策としては、個々の口腔について、棲息するミュータンスレンサ球菌の多寡とその「質」、すなわち菌種構成と病原性を知ることが極めて重要な事となる。ソブリヌス菌の存否及び保有菌株の病原性の有無を簡便迅速に判定可能なチェアサイドで行える手法の開発が切に望まれる。

### 「コンティジョン—伝染」

北里大学理学部生体防御学講座

熊沢 義雄

「アウトブレイク—感染」など医学ミステリー作家として知られているロビン・クックの最新作が「コンティジョン—伝染」(林 克己訳、早川書房) である。院内感染がテーマだが、通常の院内感染ではなく、アメリカ国内で起こりうる感染症の肺ペスト、野兎病、ロッキー山紅斑熱、インフルエンザが次々と総合病院内で発生する。最後に原因を解明しようとする主人公と犯人が共にインフルエンザに感染するが抗ウイルス剤を飲んでた主人公が助かり、全貌が明らかになる、という話である。インフルエンザを除き、このような感染症による院内感染が日本で起こることはないだろうが、もし発生したら大パニックになることは容易に想像できる。

昨年の腸管出血性大腸菌 O157 による集団食中毒もその対応におおわらわであったが、本年も散発的に発生している。また、サルモネラによる感染も問題となっている。「グルメ志向」で「生がいい」という国民の風潮に警鐘を鳴らしたといつてよいだろう。O157 による疾病はペロ毒素がその主役であるが、今年はその先祖ともいべき志賀赤痢菌発見 100 周年である (北里研究所により記念の会がもたれることは会報で案内のあった通りである)。当時は病原菌が次々と発見され、細菌学の最初の黄金期であった。

黄金期では、多くの若手研究者が感染症、特に細菌感染症の解明に情熱を傾けたが、現在では、細菌学に興味を持つ学生の数が少なくなっている。上述のミステリーでも疾病管理センター (CDC) が事件の解明に貢献してい

る。職員数を比較しても日本より圧倒的に多い。O157を始めとして感染症対策に多大な研究費が投入されたが、スポット的であるような気がする。感染症に興味をもつ若手研究者の数が増えるような予算の配慮も必要ではないだろうか。研究の「減衰」という名の「伝染病」だけは避けたいものである。

## 「ニューヨークでの留学体験記」

千葉大学医学部微生物学第二講座

三宅 眞実

私は1990年から2年間、米国ニューヨーク市のコロンビア大学で研究する機会を得た。ニューヨーク市はご存じのようにアメリカ東海岸の経済、文化の中心であり、市内5つの区の1つ、マンハッタン区がニューヨークの代名詞として観光客に知られている。ただし観光客が訪れるのはほとんどの場合、区中央にあるセントラルパークより南の地域であるのに対し、コロンビア大学の病院及び医学関連棟（メディカルセンター）はかなり北、168丁目の地下鉄の駅から徒歩1分の場所にある。この地域はハーレムと呼ばれる比較的治安が悪い地域で、しばしば大学掲示板に「〇月〇日〇時頃 168 丁目地下鉄駅構内で殺人事件があった、目撃したものは警察へ連絡してください」と掲示されていたのを記憶している。私は地下鉄は利用せずハドソン川を隔てた対岸の州、ニュージャージー州からバスで通っていたが、大学からバスターミナルまで（バスターミナル自身治安面で不安があった）10分間程度の距離を歩かなければならないことを考えると、深夜まで研究することには不安を感じざるを得なかった。アメリカ東部に立地する歴史ある私立大学、いわゆるアイビーリーグ5校の中で、このような環境にあるコロンビア大学は特異である。

ニューヨークが文字どおり人種のるつぼであるというのは決して過言ではない。隣の研究室のボスはギリシャ人、ポスドクはフランス人、大陸系、台湾系中国人や韓国人で、大学院生はジャマイカ系、テクニシャンはフィリピン系、陽気なお掃除おじさんはイタリア

系だったといった具合である。滞米中それほど自分の下手な英語が気にならず、自分が外国人であることを強く意識せずに済んだのは、このようなニューヨークの独特な人種構成のおかげであろう。

滞米中は Columbia-Presbyterian Cancer Center の Dr. Weinstein 指導の下、発ガン過程における細胞情報伝達系に関する研究に従事した。そのころの研究室は、C-キナーゼの過剰発現細胞が癌化するという論文を Cell に発表した直後で、一つの隆盛を極めていた感があった。ちょうど多くの研究者達が Ras の downstream effector を懸命に探しているときで、Raf が Ras の下流にあるらしいことや Sos というアダプターが Ras 活性化に重要らしいという報告が Nature や Science に掲載され、いわゆる癌遺伝子の機能が徐々に明らかにされていく興奮をごく身近に感じることができた。研究室のポスドク、大学院生は、それぞれが自分たちは先端の発見の一角を担う研究者の一人であるという意識を持ちながら仕事をしていたように思う。

このような研究室に所属し、宿主-寄生体相互作用を考える上で必須である宿主細胞の細胞情報伝達機構の研究手法を学んだ経験は、現在及び今後の研究方針の道標になっている。あれから5年経ち、当時研究室の窓から見えたミッドタウンの摩天楼は記憶の中で色あせつつあるが、その時の学術的興奮は今でもはっきり思い出すことができる。

---

---

日本細菌学会  
関東支部 ニュー ス  
第29号

(1997. 9. 15)

発行：日本細菌学会関東支部

〒102 東京都千代田区富士見1-9-20

日本歯科大学微生物学教室内

☎03-3261-8311 (内線330)

---

---